時代における課題の解決は企業の責任である以上にチャンスでもある
－歴史と共に歩む Panasonic

北京大学学生代表

見学日時：2023年11月29日（水）10:00-11:45
見学場所：パナソニックミュージアム

見学概要

11 月 29 日の午前、私たちは大阪府門真市のパナソニックミュージアムを訪れた。パナソニックミュージアムは 2018 年のパナソニック創業 100 周年の折に開設され、1933 年に建設された同社第三次本店の場所に建てられており、主に松下幸之助歴史館とものづくりイズム館からなっている。

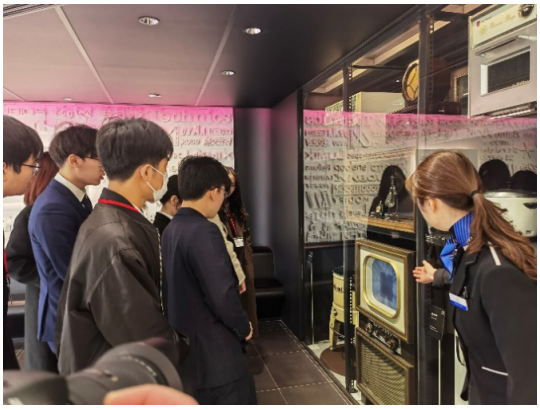
パナソニックミュージアムでの集合写真

松下幸之助歴史館は当時の建物のデザインを忠実に再現しており、全体的に帆船を模して建てられ、当時の「煙突」構造の意匠を踏襲している他、屋根の舵輪には会社の発展を牽引するとの意味が込められている。松下幸之助歴史館は展示室、創業の家、学びの社、ライブラリーの 4 つからなる。展示室では松下幸之助氏の五代自転車商会での丁稚奉公時代から松下電気器具製作所創業及び二股ソケットなどの新規事業、そして今日のグローバル企業としての発展までといった 100 年の事業史を 7 章建てで紹介している。その中の第 3 章「命知」はパナソニックの企業文化の源とも言える最も重要な部分であり、パナソニックの「命知」の年である 1932 年、松下幸之助氏は「事業を通じて社会から貧困をなくす」との産業人としての真の使命そして企業の社会的責任を自覚すると共に、この世に物資を満たし世の中を豊かにするとの水道哲学にたどり着いた。

パナソニックミュージアムの外観

その後、ものづくりイズム館において団員らはパナソニックが 20 世紀に生産したテレビ、ラジオ、冷蔵庫等様々な家電製品を見学し、各年代におけるパナソニックの驚くべき技術そしてパナソニックが家電製品を中心に生み出し続けているくらしにおける新たな生活文化を目の当たりにした。ものづくりイズム館では唯一無二の「ものづくりスピリッツ」を紹介していて、先人たちの家電製品における創意工夫を知ることができた。

ものづくりイズム館



ものづくりイズム館の見学の様子

パナソニックミュージアムの見学を終えた後、団員らはパナソニック（中国）の楊帆氏とビデオ形式の交流を行い、楊帆氏からは家庭用水素燃料電池、カーバッテリー寿命判定、コンビニにおけるエネルギーマネジメント、スマート家電に関する包括的設計等、パナソニックグループの将来的な発展戦略についての紹介があった。

パナソニックミュージアムの紹介ビデオを視聴し従業員と交流する団員らの様子

パナソニックの新たな製品ラインアップからは、同社がユーザーの効率的なエネルギー利用、家電全体としての省エネ環境保全に専念していることが窺える。そしてこの点は、松下幸之助氏が提唱した世の中を豊かにするとの産業人の使命を同社が依然として体現していることを物語っている。

ご存じですか？

問：パナソニックが最初に生産した電気器具は何か？

答：1918 年 3 月 7 日、松下幸之助氏はむめの夫人、その弟の井植歳男氏と 3 人で松下電気器具製作所を設立し、最初の製品として改良アタッチメントプラグを生み出した。むめの夫人は製品の包装及び会計業務を担当し、井植歳男氏は配線器具の樹脂系接着剤の製造を担当した。その後、様々な配線器具の製造販売により事業が拡大した同社は、1923 年には自転車用電池式ランプを開発・発売し、砲弾型電池式ランプを生産した上で販売店での試用・宣伝用に無償で提供するなど、最終的にヒット商品となった。その後、パナソニックは電気器具業界に進出しアイロン等の生産を行った。

問：パナソニックの企業文化の中核は何か？

答：パナソニックの事業が拡大していく中で、松下幸之助氏は事業に対する使命感が日増しに強まり、1929 年にそうした使命感を綱領・信条として明文化し、企業は営利だけを目的とせず、社会的責任も負うべきとの点を表明した。その後 1932 年に松下幸之助氏は「事業を通じて社会を豊かにする」との真の使命に目覚め、この 1932 年は現在のパナソニックにおける「命知」元年となった。また 1935 年には「松下電器基本内規」を定め、その中の「松下電器が将来いかに大をなすとも、常に一商人なりとの観念を忘れず、従業員またその店員たることを自覚して、質実謙譲を旨として業務に処すること」との点が松下電器としての初心となった。

問：中国の近代化におけるパナソニックの果たした役割は何か？

答：1978 年、松下幸之助氏はテレビ事業部において鄧小平副総理（当時）の訪問を受け、その際の鄧小平副総理の要請に応じる形でパナソニックは 1987 年に中国において合弁のカラーブラウン管製造会社を設立し、中国におけるカラーテレビの生産を後押しするなど中国の人々のくらしの向上に貢献を果たした。

また 2018 年 12 月、松下幸之助氏は中国の近代化に貢献した世界の 10 人に選ばれ、「中国改革友誼奨章」を授与された。

そしてパナソニックが中国で設立した最初の合弁会社（北京・松下彩色顕像管有限公司）の跡地には松下記念館が建設され、パナソニックとして海外初の記念館となった。

感想

パナソニックは成功を収めた電気機器企業であるだけでなく、それ以上に時代と共に前進する社会参加型企業であると言える。パナソニックはこれまで「人間本位」の理念を守り続け、時代における課題の解決を企業の責任としている。松下幸之助氏はかつて「困難も発展の過程の一コマ」との言葉を残している。

大不況の際に従業員の仕事を守り、従業員の勤務時間を半減し帰属感や営業への熱意を高め、最終的にストック品を売りつくすとの「奇跡」から、「商品を製造することの真の使命は安価で良い商品を社会に行き渡らせることで人々の生活を良くしていくことである」との水道哲学の提唱、フォード式生産方法の導入による収益向上、さらに生態環境への配慮や自身の 60 年来のコールドチェーン事業経験から生鮮スーパーにおける設備の浪費削減のための監視を行うスマートシステム等の「エコクラウド」を生み出し新たな収益事業を開拓するなど、パナソニックは常にイノベーションを社会問題の解決と組み合わせている。

たゆまぬイノベーション、社会への積極的な関わりそして環境への配慮を通じて、パナソニックは企業としていかに時代の大きな流れの中で力強く発展していくかを示している。企業は時代に適応し変革するだけでなく、それ以上に社会問題の解決に尽力しなければならない、なぜならそうした積極的な関わりの中からしか企業は持続的発展につながる機会を見つけることができないからであるとの点をパナソニックの経験は私たちに告げている。